

唐代の暦日・進朔一覧

竹迫 忍

2022年12月27日 第一版

この資料は以下の報告書に掲載された内容を更新したものである。
なお、変更箇所は赤字で記載した。

平成25年(2013年)10月

「日本古代の時間制度・観念と初期陰陽道に関する研究」

(課題番号 22520700)

平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費 基盤研究(C)研究成果報告書

研究代表者 細井浩志(活水女子大学・文学部・教授)

研究協力者 竹迫 忍

摘要

1. ここに掲げるのは、唐の暦日に関する史料と、各時期の暦法に基づく計算を表にしたものである。本表が想定する、実施された月朔は、濃い灰色の行の 8)朔干支、及び濃い灰色の行がない年は、白抜きの行の 19)干支である。

2. 表の各行の色分けは、次の基準に基づく。

白抜き:史料の無い月朔

薄い灰色:史料の有る月朔とその情報

濃い灰色:史料からの推定で干支を決定できた月朔

3. 表の各欄の説明

1)年干支

2)西暦:唐年号/年に対応する西暦年

3・4・5・6)唐年号/年/閏/月:唐代の各暦法で計算される暦月

7)情報:史料に残る情報(朔、30日等)

8)朔干支:史料からえられた月朔の干支

9・10)日/日干支:史料に残る暦月の途中の日付とその干支

(これから月朔を逆算可能)

11・12・13)文献/巻/頁:参照した文献名とその記載ページ

14)記事:日食等のその日の記事

15)進朔:進朔の有無。計算では進朔だが、史料で進朔していない時は「不進朔」とした。

16)正誤:暦算結果及び推定進朔限から得られる月朔干支(19)と、実際の月朔干支(8)との相違。「誤」の場合は、暦計算の結果と実際の月朔干支とが異なっている。

17)備考:正誤の理由等

18)日数:当該暦月の計算上の大小(30日か29日か)。ただし実施暦の大小ではない。

19)干支:暦算結果及び推定進朔限から得られる月朔干支及び干支番号

20)定朔:各暦法による暦算結果の定朔の干支番号(進朔前)

(ただし詳細の判明しない観象暦のみ正元暦で代用した)

21)進朔限:推定した進朔限(0.00なら進朔限なし)

22)小余(H):暦算結果の定朔の小余を24時間制で換算した値

23)二十史:「増補二十史朔閏表」陳垣(中華民国60年)での月朔干支

24)合否:史料からえられた月朔干支(8)と二十史(23)の月朔干支の比較

25)理由:今回の修正の理由

4. 備考の欄の説明

- 1)隣月計算:隣月の朔干支から計算された月朔。例えば前月の朔干支が甲子(0)、翌月の朔干支も甲子(0)の場合、両月朔の間の日数が 60 日となり、当月の朔干支は甲午(30)と決まる。
- 2)閏月で判明:閏月より判明した月朔。中気との関係で進朔により閏月が移動する場合、進朔の有無が判断できる。
- 3)閏調整:閏月の調整が行われたと思われる月朔。実施暦の閏月が計算値と違う場合。
- 4)誤記:計算した月朔と 2 日以上之差がある場合など計算値と大きな違いがある場合
- 5)誤記修正:誤記と思われる記事を修正して得られた月朔
- 6)退朔:計算より1日早い月朔
- 7)暦計算誤差:復元した計算方式と古代の計算に、わずかな差があると思われる月朔。計算上はわずかに翌日の午前 0 時過ぎになるが、実施暦では前日の場合など。

5. 各年代の暦法

暦法の計算は、「舊唐書」および「新唐書」暦志に記載の各暦法に基づいている。観象暦については記載がないため直前の正元暦にて計算した。

戊寅暦(定朔) 619-644 (武徳2~貞観18)

戊寅暦(経朔) 645-665 (貞観19~麟徳2)

麟徳暦(以降定朔) 666-728 (乾封1~開元16)

(月の影響に使用する値を[経朔]時刻から[経朔+太陽の影響]に修正)

大衍暦 729-762 (開元17~宝応元)

五紀暦 763-783 (広徳元~建中4)

(月の影響に使用する値を[経朔]時刻から[経朔+太陽の影響]に修正)

正元暦 784-806 (興元元~元和元)

(月の影響に使用する値を[経朔]時刻から[経朔+太陽の影響]に修正)

観象暦(宣明暦代用) 807-821 (元和2~長慶元)

宣明暦 822-892 (長慶2~景福元)

崇玄暦 893-907 (景福2~天佑4)

6. その他

- 1)永昌元年(689)~聖暦元年(698)の 11・12 月を、一般の長暦では翌年の正・臘月としているが、本表ではそのまま 11・12 月として記載している。

2)上元2年(761)11月～宝応元年(762)4月は、建子月～建巳月ではなく、そのまま11月～4月としている。

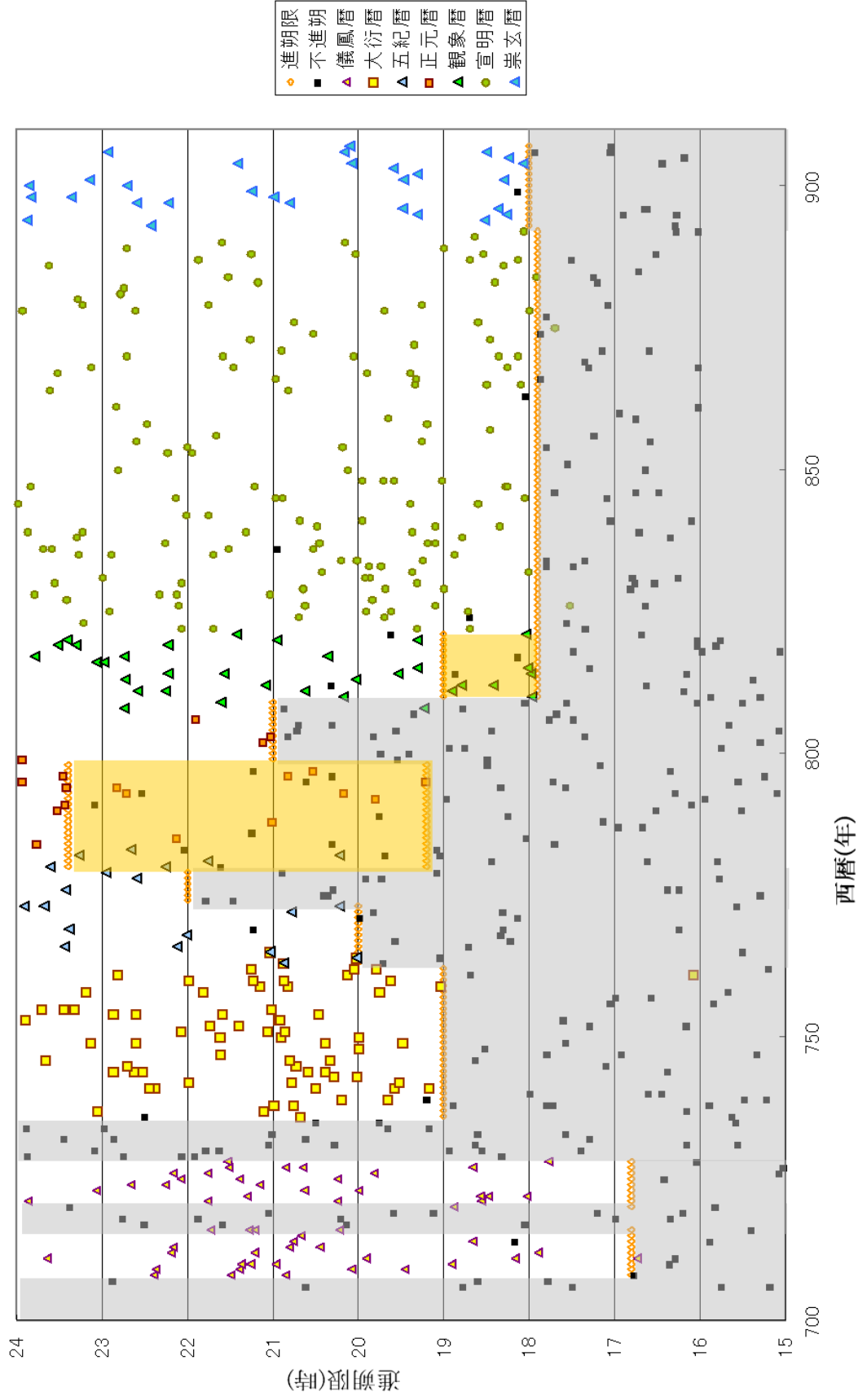
3)大中6年(852)の閏月：長曆では閏7月としている。この年の9番目の暦月の月朔は甲子(0-6695)、またこの年の秋分の干支も甲子(0-281)。この第9月は進朔限より上のため進朔した場合には、この月に中気がなくなり閏8月となる。該当月の史料が無いため、ここでは進朔したとして閏8月とした。

4)本表が引用する各文献の墓誌史料は、重複する場合もありうる。同一史料であってもそのまま掲載しているので、注意されたい。

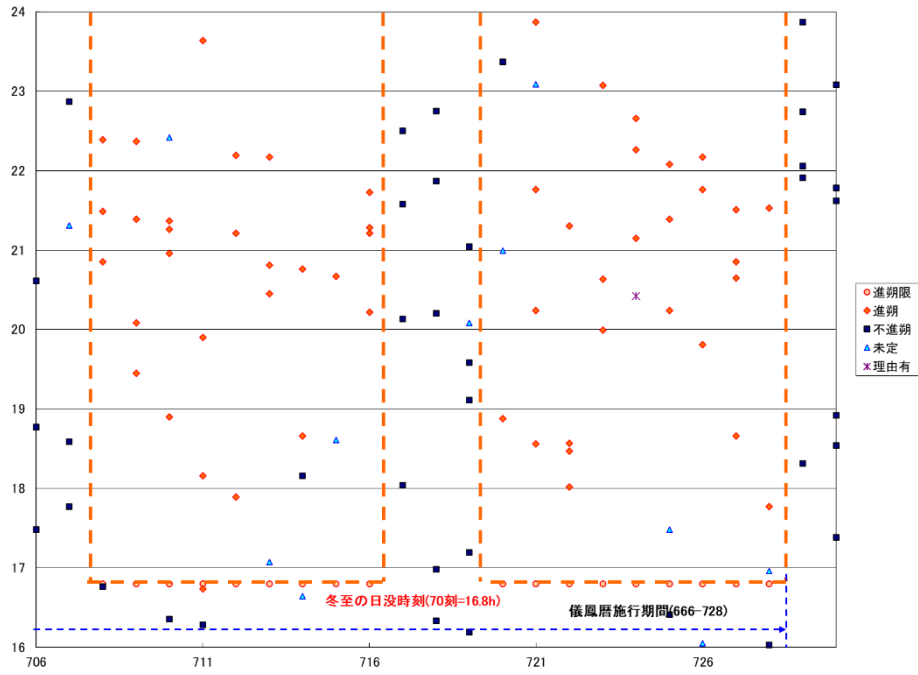
引用文献

- 1.「舊唐書」中華書局(1975)、全16冊
- 2.「欽定全唐文」董誥等編、経緯書局(1965)、全20巻
- 3.「唐會要」世界書局印行(中華民国63年)、全3巻
- 4.「冊府元龜」中華書局(1960)、全12巻
- 5.「資治通鑑」中華書局(1956)、全20冊
- 6.「新唐書」中華書局(1975)、全20冊
- 7.「全唐文補遺」三泰出版全10冊(1-9,千唐(1994-2007))
- 8.「全唐文補編」中華書局(2005)、全3巻(上中下)
- 9.「唐代墓誌彙編」上海古籍出版社、全3巻(上・下(1992) 続(2001))
- 10.「隋唐五代石刻文献」北京図書館出版社(2003)、全4巻
- 11.「入唐求法巡礼行記」円仁、東洋文庫、全2巻(157(1970),158(1985))
- 12.「金石与唐代曆日」王化昆、国家図書館出版社(2012)、1巻
(文献12は文献1)から11)に未収録の記事のみ利用した。)
- 13.「新五代史」中華書局(1974)、全3冊

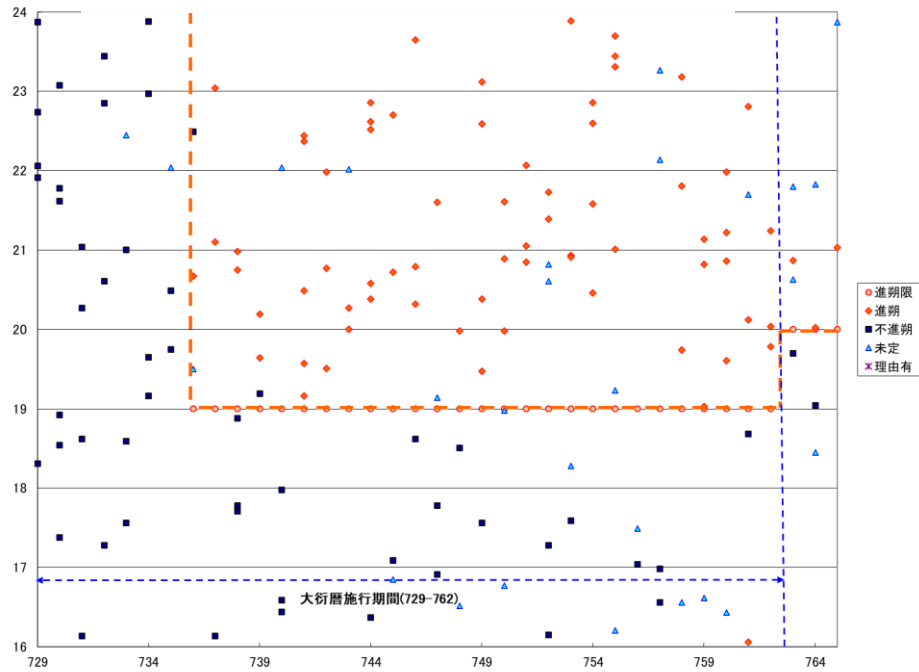
唐代の進朔分布図



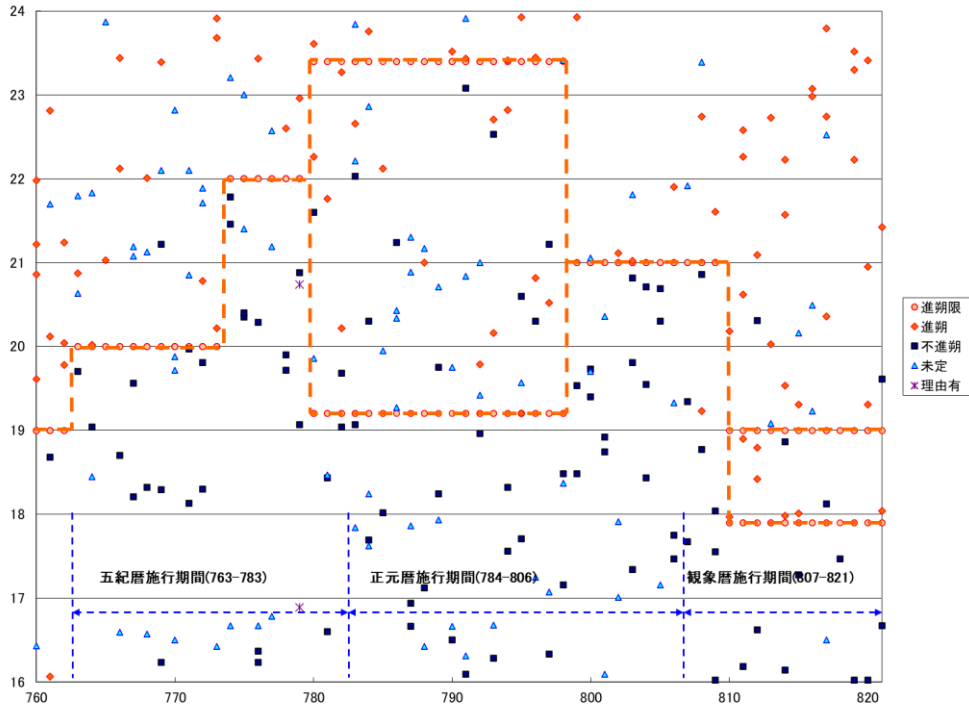
儀鳳曆時代の進朔分布図



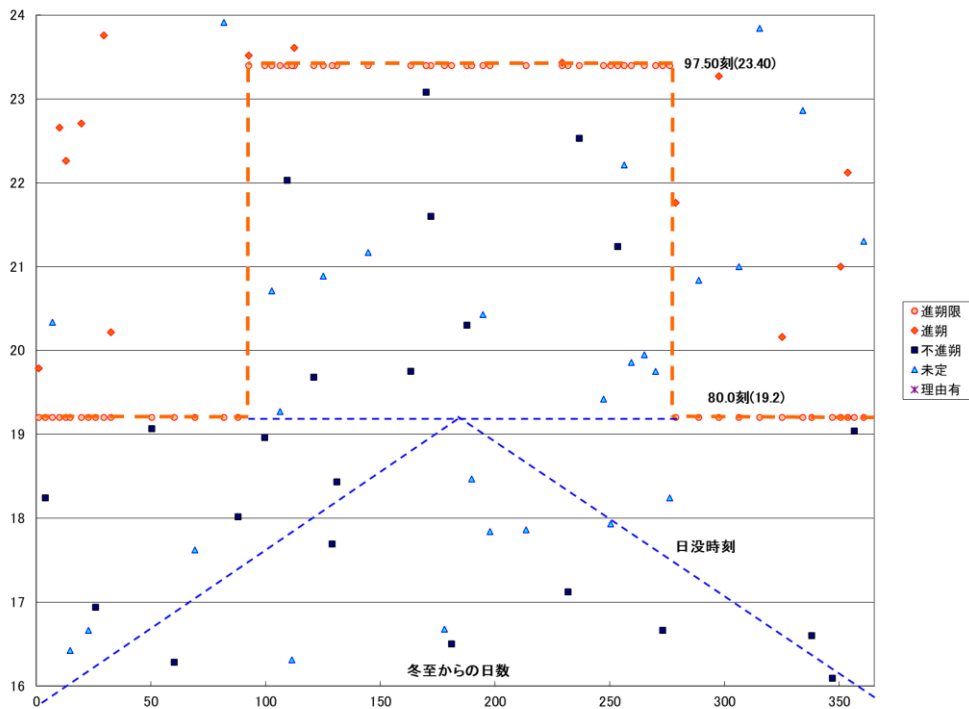
大衍曆時代(729-762)の進朔分布図



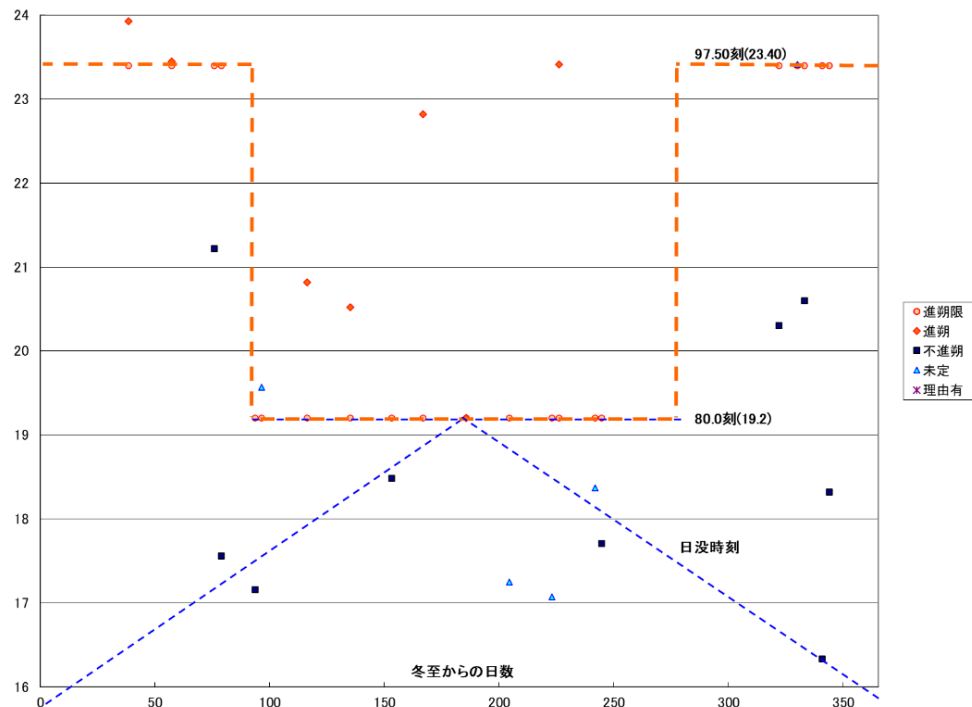
進朔限(760-820)分布図



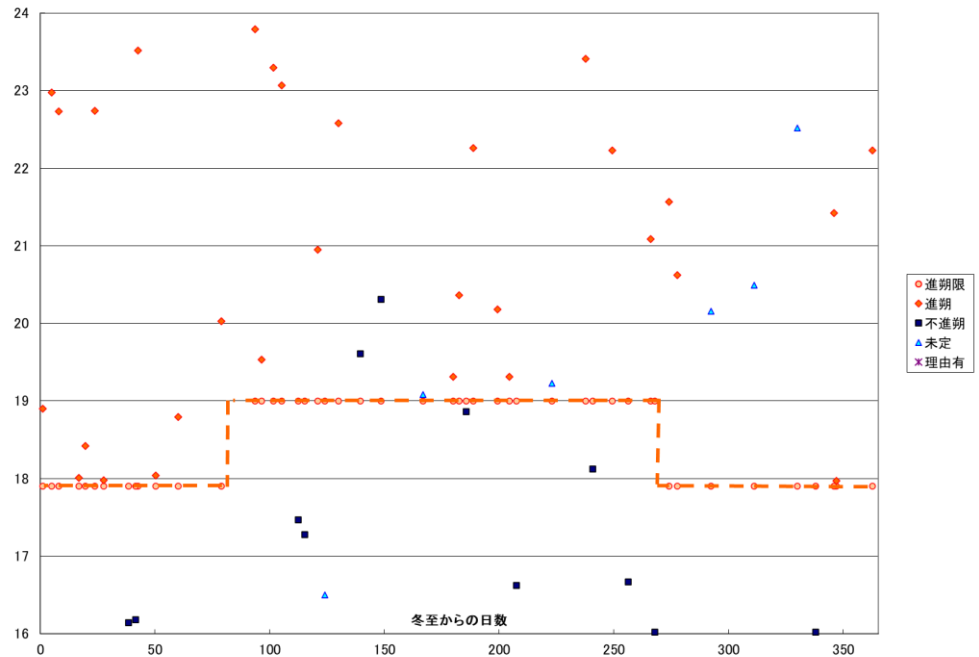
進朔限(780-793)分布図



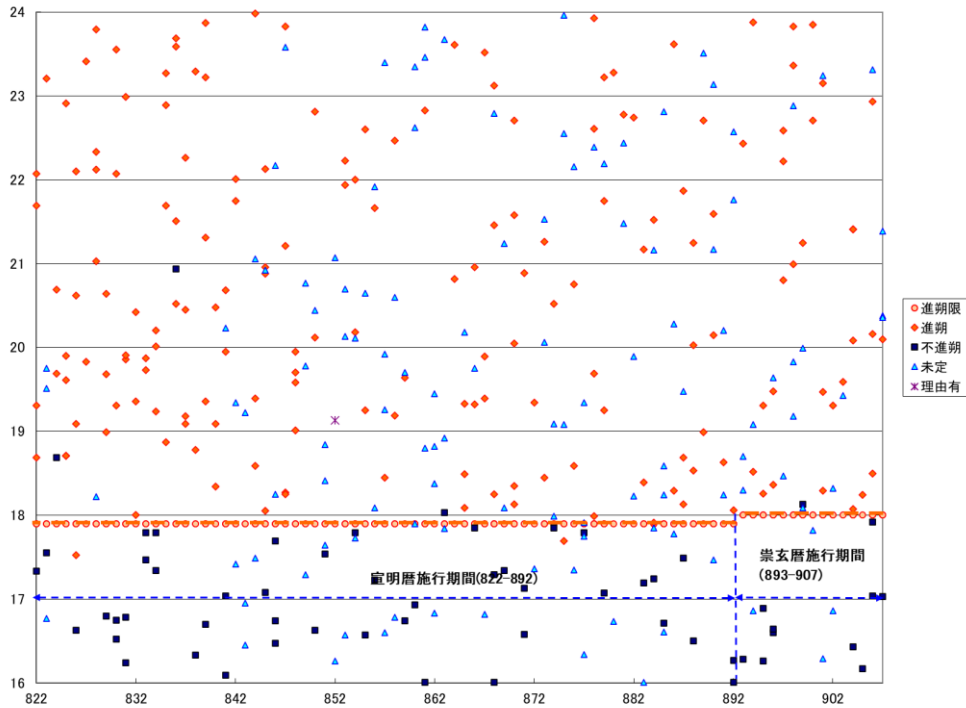
進朔限(794-798)分布図



進朔限(810-821)分布図



進朔限(822-907)分布図



進朔限の修正一覧

施行期間		施行曆	研究報告		今回	
開始	終了		計算に使用した曆	進朔限	計算に使用した曆	進朔限
619	644	戊寅曆(定期)	戊寅曆(定期)	-	戊寅曆(定期)	-
645	665	戊寅曆(常朔)	戊寅曆(常朔)	-	戊寅曆(常朔)	-
666	728	儀鳳曆	儀鳳曆	708-716: 17.5h 717-719: 進朔無 720-728: 17.5h	儀鳳曆	708-716: 16.8h(70刻) 717-719: 進朔無 720-728: 16.8h(70刻)
729	762	大衍曆	大衍曆	729-735: 進朔無 736-762: 19h	大衍曆	729-735: 進朔無 736-762: 19h
763	779	五紀曆	五紀曆	763-773: 20h 774-779: 22h	五紀曆	763-773: 20h 774-779: 22h
780	783			780-783: 19h(秋分後) 22h(春分後)		780-783: 19.2h(秋分後) 23.4h(春分後)
784	806	正元曆	正元曆	784-793: 19h(秋分後) 22h(春分後) 794-803: 21h 804-806: 22h	正元曆	784-793: 19.2h(秋分後) 23.4h(春分後) 794-798: 23.4h(秋分後) 19.2h(春分後) 799-806: 21h
807	821	観象曆	正元曆(代用)	807-808: 22h 809: 進朔無し 810-821: 18h	宣明曆代用	807-809: 21h 810-821: 17.9h(秋分後) 19h(春分後)
822	892	宣明曆	宣明曆	822-892: 18h	宣明曆	822-892: 17.9h
893	907	崇玄曆	崇玄曆	893-907: 18h	崇玄曆	893-907: 18h